

コンテンポラリーダンスと非人間の表象：ポスト人間中心主義における自然観

越智雄磨（東京都立大学）

昨今、世界規模の気候変動を前にして、エコロジー思想や人間中心主義への批判がさまざまな領域で興隆している。現代アートやコンテンポラリーダンスにおいても例外ではなく、科学技術や自然を問い直し、非人間、非生物を主要な「アクター」と捉える作品も多く見受けられる。

美術史家エステル・ゾング・マンガルと協働して創作されたジェローム・ベルの『非人間のダンス』（2023）は、17世紀以来のヨーロッパにみられる非人間的な存在の表象の歴史を追跡するレクチャー・パフォーマンスである。また、科学史家であり演出家でもあるフレデリック・アイ＝トゥアティは哲学者ブルーノ・ラトゥールやエマヌエーレ・コッチャと協働し、人間以外の「アクター」に焦点を当て、人間と地球の関係を再考する作品『地球三部作』：『Inside』（2016）-『Moving Earth』（2019）、『Viral』（2022）や地球のサイクルを身体で素描する『地球の舞踏会』（2023）を創作している。

また日本においても、地震のリスクに絶えずさらされている日本人の「揺れる」という身体感覚をテーマにしているハラサオリの『P Wave』（2024）は、日本に特有の事象と感覚を扱っているようでいて、人間の主体的意思を超えて人間の精神と身体に影響を及ぼす自然的現象を扱っている点において、フランスにおける昨今の「非人間」の表象と同じ文脈の上に位置づけることも可能である。

ダンスは元来、視覚性だけではなく、観る者がキネステーズを起動させながら参与的に体験するという特質を強く持つが、他方で相応の時間を経て、近代的な劇場に自らを適合させていったという歴史を有する。ダンスが適合した近代の劇場とは、パースペクティブに基づいた視覚を制度化し、それを身体的技術として受肉させ、混沌に満ちた自然を飼い慣らす近代的な文化装置＝「星のない劇場」のことである。他方で、上に挙げた「非人間」を表象しようとする昨今のダンスは、今一度その閉じた劇場を外に開き、プレモダンの時代に見られた人間以外のアクターや非人間、あるいは自然現象と人間とのつながりを現代的な視点で再び舞台に呼び戻そうとしているように見える。

人間と自然の関係を、主体と対象の関係と考える二項対立的モデルではなく、相互に影響を与え合うものとして再考する上で、現代のダンスはユニークかつ有効なアクチュアリティを示している。そこで、人間の主体のあり様や自然の概念と表象はかつてとは異なる相貌を見せているはずである。